ニュースピーカーとしまくとぅば劇の効果

石原昌英

1. はじめに

しまくとぅば劇の効果に関する調査は令和元年度で 3 回目である。平成 29 年度の調査では沖縄ハンズオン NPO でしまくとぅば劇に演者・地謡（じかた）として参加した男女の若者にグループインタビューをし、また、しまくとぅば劇に演者として参加したハワイ出身の沖縄系アメリカ人 4 世の 20 代の女性にインタビューした。平成 30 年度の調査では、劇団創造でしまくとぅば劇に演者として参加した 50 代の男性にインタビューをした。この 2 回の調査でわかったのは、次のようなことである（石原 2018，2019）。

1）若者達は、劇を通してしまくとぅばが自分たちのことばでもあることを自覚するようになった。
2）しまくとぅばをより深く理解できるようになって、沖縄民謡の意味を考えて歌えるようになった。
3）ある程度しまくとぅばの文法的知識を得てから、劇に参加した方がよい。台本は日本語としまくとぅばの併記が望ましい。
4）若者は、しまくとぅばを用いながら年配者と交流をすると、年配者がより深いところまでこころを開くようになったと感じた。
5）ことばは使われなくなるとなくなってしまうことを実感した。
6）だれが、どこで、どのような観客を対象にしまくとぅば劇を上演するかで、台詞のことば（沖縄芝居ことば、やんばることば、宮古ことばなど）を変えた方がいい。
7）指導者は、演者がしまくとぅばを母語としていないことを踏まえて指導するべきである。間違えたときに頭ごなしにしかってはいけない。

今年度の調査では、12 月 26 日に琉球大学において、プロの沖縄芝居役者である夫婦が指導するうちなー芝居講座に 5 年間にわたり参加した 40 代前半の女性にインタビューを行った。

2. プロが指導するうちなー芝居講座に参加して

沖縄芝居俳優の平良進と故平良とみが指導したうちなー芝居講座に 5 年間にわたり参加した大城智子（敬称略：氏名を示すことに了解を得ている）に 2019 年 12 月 26 日に 1 時間程度インタビューした。この節ではその内容について記し、分析を試みる。

大城は、幼い頃祖父母・両親と一緒に住んでいた。祖父母は大城の両親と話す時はしまく

とぅばで話したが、孫である大城との会話では日本語のみが使われていた。そのような言語環境で育ったので、大城にはしまくとぅばで話すという機会はなかった。しかし、大城はしまくとぅばが使われる家庭でそだったので、聞いて少しはわかるようになっていた。

大城がしまくとぅばを初めて学んだのは沖縄県にある大学に在籍したときである。大学では英語系の学科で学んだが、4 年生の時に所属したゼミでは指導教員の方針で学園祭において学生によるしまくとぅば劇を上演していた。そのことを知っていた大城は、「自分がしまくとぅばをしゃべると祖父がよろこぶかなと思って」そのゼミを選択したようである。台本は日本語で書かれていて、演者として参加した学生は日本語の台詞を家族等の協力を得てしまくとぅばに翻訳して、それを覚えることが指示された。大城は、祖父はことばが聞きづらかったので、父（現在は 70 代半ばで、しまくとぅばが使える）の協力で翻訳作業を進めた。父親は、最初は戸惑っていたが、なれてくるとスムーズにしまくとぅばが出てくるようになったので、翻訳作業が進んだ。大城によると、父は最初のころは、「自分は方言札をかけられて、うちなーぐちを話さないように教えられたのに、なんであんたは、なくなろうとすることばをおぼえようとするのか」と冗談を言っていたが、よろこんでいたようである。大城は、「台詞を覚えると、父と祖父に方言で話すことができ、父と祖父が話していることが理解できるようになったのでうれしかった」と語った。大城によると、劇を観た父と祖父は感動し、祖父は「智子がしばいしー（役者）になったらどうしようかね」と冗談をいうほど、喜んでいたようである。

練習は本番の 3 ヶ月前から始まったが、本格的に取り組んだのは 1 ヶ月まえからである。演者が翻訳してきた台詞は様々な地域のことばが反映されていたが、ゼミ生はその違いがどのようなものか知らなかったので、違和感を感ずることなかった。オリジナルが日本語であったので、しまくとぅばの台詞の意味は、ほぼ理解していた。ゼミ生が劇を離れて、覚えた台詞の言い合いをすることはあっても、会話にしまくとぅばを使うことはなかったようである。大城によると、学生は、しまくとぅばを使って会話をしたいと思ってはいるが、どう言えばいいのかわからない、聞いてもわからないので、結局日本語になってしまったようである。

大城は、大学でしまくとぅば劇に参加し、少しだけしゃべれるようになると、このことばを誰が残すのかと考えるようになった。周りはみんなしゃべれないので、祖父が亡くなったら、だれがしゃべるのかと思い、しまくとぅばの消滅の可能性を感じて、あせってしまった。

大城は大学卒業後久米島町の中学校で英語教員として勤めた。文化祭で大城たちが大学で上演した劇の台詞を半分以上は日本語に戻して、中学生に演じさせた。劇を観た地域の人たちも喜んでいて、生徒達の自信にもつながったと思った。最後に、生徒が「わったー芝居はちゃーやいびーたがやー（私たちの芝居はどうでしたでしょうか)」と聞いたら、観客が涙を流して喜んでいたので、「芝居はいいなあ」と思うようになった。子ども達は家で祖父母としまくとぅばで話すと通じたので、うれしかったようである。

大城は、久米島町の中学校で勤務したのちカナダに留学し、帰国してから平良進・とみ夫妻が指導するうちなー芝居講座のことを知った。中学校で生徒達といっしょにしまくとぅ

ば劇をやりたいとの思いもあったので、講座に参加するようになった。講座は１年間に４回あった。各講座で受講生は１週間に１回の頻度で10回のクラスで学び、最後には芝居を上演する。講座は10名程度が参加し、年代は２０代から５０代までで、しまくとぅば能力はさまざまであった。平良夫妻はしまくとぅばを用いて指導をしたが、夫妻のことばを理解できる者もいれば、「え、いま何て言ったの？」というレベルの者もいた。夫妻が指導にしまくとぅば使ったので、聞く練習にはなった。講座では、平良夫妻から、台詞の言い方や所作・立ち回りを細かく指導され、鍛えられた。芝居で使うことばは、標準を那覇方言においた芝居言葉であった。

大城によると、講座で学ぶ劇の題材は歌劇、時代劇と現代劇であった。最初は、歌に載せた方が、受講者が台詞をいいやすいであろうというので、歌劇をならった。３回目あたりからは、普通の台詞をしゃべる芝居に変わった。受講生が台詞のある芝居のほうが楽しいと言ったら、平良夫妻も賛同して芝居を指導するようになった。歌劇では、指導者の平良夫妻が歌うのを復唱する形で歌を覚えた。普通の芝居では、平良夫妻がいう台詞を録音して覚え、同じような発音・抑揚（イントネーション）で台詞をいう練習をした。うちなー芝居では、もともと台本がなく、口承で覚えていた。講座では、簡単な台本はもらうが、「あんた、これも言いなさい。あれも言いなさい。」で、どんどん台詞が増えて、覚えきれなくなったので、録音するようになった。最初の頃は、しまくとぅばはそんなにしゃべれるということではなかったので、台本は必需品であった。

大城は、うちなー芝居講座に５年間にわたり参加し、出演した芝居は２０作品であった。その５年間で、しまくとぅば能力はかなり向上し、平良夫妻が言うことの７割が理解でき、観客としてうちなー芝居を観ても台詞の７割以上が理解できるようになっていた。また、自分が言いたいことをしまくとぅばで言えるようにもなった。それでも、平良夫妻とは、ところどころにしまくとぅばを使うことがあっても、しまくとぅばの敬語がむつかしいので、失礼があってはいけないと思い、日本語で話していた。講座で学ぶうちなー芝居には敬語の台詞もあるが、断片的なもので、実際の会話で使えるほどの知識はつかなかった。一方で、講座参加者とは基本的には日本語で話していたが、会話の１割とか２割はしまくとぅばで話した。大城は、敬語と敬語ではない普通のうちなーぐちを教える必要があると思っている。

大城によると、平良夫妻とはしまくとぅばで話すことはなかったが、父や叔母とは、しまくとぅばで話すことが増えたようである。かなりしゃべれるようになったと自信を持っていたので、父や叔母としまくとぅばで会話ができることをうれしく思っていた。叔母は、「方言しゃべれるの、あなたはしばいしーになるんじゃないの」と冗談を言っていた。

大城によると、中学生としまくとぅば劇をしたいというのが講座に参加した主な理由であったが、そのような機会はなかった。教員採用試験に合格して宮古島市の中学校に赴任した。そこで、中学生と劇をやりたいと思ってはいたが、多忙であったのと、地域のことばが沖縄島のことばとは異なるために、うちなー芝居はできないと思って断念した。しかし、宮古島市の出身で、芝居が趣味であった校長先生が中学生に宮古島市のことばで芝居を教えたので、着付けとかの手伝いをした。

大城は、上記を除いては、いままで勤めてきた中学校では、時間がとれなかったので、生徒たちが学習発表会等でしまくとぅば劇を上演するということはなかった、と述べた。授業時間では無理で、やるとすると宮古島市の中学校のように、放課後にクラブ活動として指導するしかない。久米島の中学校でしまくとぅば劇を指導したときには、総合学習に組み込むことができたので、授業中とか、放課後の空き時間に劇の練習をする時間を設けることができた。今も、総合学習の時間はあるが、内容が細かく決められているので、しまくとぅば劇をとりいれるということは難しくなってきている。1年生の総合学習は「郷土学習」がテーマなので、しまくとぅば劇を取り入れる可能性はありそうである。ただ、多くの学校では新聞をつくっているようである。大城は、自分がとりもどすことができたしまくとぅばを残したいと思っていて、せっかくうちなー芝居講座で平良夫妻におそわったので、しまくとぅば劇クラブを作って子供たちに教えたいと考えたことはあったが、実現はしなかった。勤めている中学校でしまくとぅばを使う生徒は一人もいないのではと推測している。

大学のゼミとうちなー芝居講座で劇を学んだことの効果に関する質問に対して、大城は次のように答えた。台詞としてしまくとぅばを覚えるので、敬語も含めて、いろんな応用の仕方もわかるようになった。実際に使うことは多くはないが、使えるようになったことが効果である。しかし、宮古島市の中学校に赴任して、沖縄島のしまくとぅばと芝居から離れた期間が長かったので、聞く力を含めて言語能力が低下して、いまテレビなどのしまくとぅば劇を観ても5割程度しか理解できなくなっているのがわかってショックをうけた。ことばは、話さなくなるとわすれてしまうのだなと実感した。ピーク時には芝居を観てほとんど理解できて、かなり話すこともできたのに、今は自己紹介程度のことしか言えなくなってしまっている。父や叔母との会話でも「まーかい　いちゃびーが（どこに行きますか)」程度のことしか言えない。ことばは使わなくなると失ってしまうなとすごく強く感じている。言語を維持するためには継続して使うことが大事であると痛感している。

最後に、大城は、しまくとぅばを知らない人が芝居を観ることを考えて字幕をつけることが大事であるとのべた。大城は、意味のわからない芝居をみることは苦痛であるので、観客が芝居の内容を理解できるようにするべきであると考えている。

３．分析

大城へのインタビューから分かったことは次のようなことである。

1）若者にはしまくとぅばで話をしたいと思っていても、その言語知識がないので、話すことも聞くこともできない者が多い。しまくとぅば劇は、そのような若者に話す機会をあたえることができる。その際に、日本語の台詞を、家族等の協力を得ながら、演者みずからがしまくとぅばに翻訳させることは効果的である。意味のわかる日本語を訳するので、訳されたしまくとぅばの意味は理解している。家族内でのそのような活動は、ことば以外のことも学ぶ機会となる。

2）しまくとぅば劇には、台本が必要である。特に初心者は聞いて台詞を覚えることは難しいので、台本を読んで覚えることになる。また、指導者等の発するしまくとぅばの台詞の録音することを認めるべきである。台本の台詞を耳で聞いて、抑揚までを覚えることができる。現在は、スマートフォンでも手軽に録音ができるので、目と耳から覚えることで効果的な学習ができると思われる。
3）劇の台詞から敬語を学ぶことはあっても、実際の会話で使えるほどに十分なものではないので、ある程度しまくとぅばが話せるようになっている者でも、年配者とはしまくとぅばで話さないことがある。敬語を間違えてつかうことで、年配しない失礼なものいいになってしまうことを恐れるのである。
4）中学生はしまくとぅば劇を通して地域の高齢者と交流することが可能で、観劇した地域の人々に感動を与えることで、自分に自信をもつことができる。少ない機会ではあるが、劇で学んだしまくとぅばを使うようになる。
5）しかし、第二言語として覚えたしまくとぅばは使わないと急速にわすれてしまう。
6）学校教育の総合学習等の時間にしまくとぅば劇を取り入れることは難しそうである。

4．ニュースピーカー

今年度の調査協力者を含め、この3年間に筆者がインタビューをした者はすべて、日本語を母語としていて、しまくとぅばを母語としてはいない。しまくとぅば講座やしまくとぅば劇に参加するなどの活動を通してしまくとぅばを学び、あらたな話者になろうと努力しているのである。いわゆるニュースピーカー（新話者）である。沖縄県（2017）や琉球新報（2017）の調査では、沖縄県内にはしまくとぅばを聞いて理解することはできるが、話せないといういわゆる受動的母語話者―ある程度の言語的知識を有している者―が50代、60代、70代に数多く存在する。石原（2018）が述べたように、そのような人たちが劇に参加することで話者になることがある。しまくとぅばが話せるようになった受動的母語話者をニュースピーカーの範疇に加えることができるであろうが、その人達でも話せるようになるには文法的な間違いや音声的な間違いを犯してきたであろう。それでもめげることなく努力を続けて話せるようになったのである。ましてや、しまくとぅばを聞くことも話すこともできない者―言語知識を全く持っていない者―が聞いて理解できるようになり、さらには話せるようになるには相当な努力が必要ある。石原（2019）でインタビューした上江洲朝男が力説するように、しまくとぅば劇の指導者はこのような努力をしている者が間違いを犯したときに頭ごなしに叱ってはいけない。叱られることで嫌気がさし、しまくとぅばを学ぶことを避けてしまい、ニュースピーカーになる機会を失してしまうからである。これは2018年11月24日に宮古島市で開催された「平成30年度　危機的な状況にある言語・方言サミット」での基調講演で田窪行則が述べていたことと一致する。しまくとぅばを母語とする者、または第二言語として流暢に話すことができる者は、若者たちの間違いに寛容であるべき

で、間違いを詰り、怒ってはいけないのである。

５．まとめ

石原（2018、2019）と本稿で述べたように、しまくとぅば劇はしまくとぅばを母語としない者が第二言語的にしまくとぅばをおぼえるうえでさまざまな効果があると思われる。しかし、祖父母や両親との繋がりを想定した学習には限界がある。子どもや孫のしまくとぅばを聞いて父母や祖父母がよろこぶのは確かであろうが、２０～30 年後にこのような学習は動機としても方法として成り立たなくなっているであろう。しまくとぅばを継承する若者世代が、なぜしまくとぅばを継承するのかを考える必要がある。また、母語ではないことばは、使われないと失われてしまうので、使う機会をどのように作っていくのかも考えていくひつようがある。せっかく、劇を通してマスターしたしまくとぅばが日常生活の場面等でも使われないと失われてしまうのである。

参考文献

石原昌英（2018）「しまくとぅば劇の効果について」『平成 29 年度　文化庁委託事業「機器的な状況にある言語･方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究」報告書』242-253 頁。琉球大学国際沖縄研究所。

石原昌英（2019）「しまくとぅば継承としまくとぅば劇」『平成 30 年度　文化庁委託事業「機器的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究」報告書』223-229 頁。琉球大学島嶼地域科学研究所。

沖縄県（2017）『平成 28 年度　しまくとぅば県民意識調査報告書』

田窪行則（2018）「ことばと生きる、ことばを残す」平成 30 年度危機的な状況にある言語方言サミット基調講演（11 月 24 日：宮古島市）。

琉球新報（2017）『沖縄県民意識調査報告書 2016』那覇市：琉球新報社。